

修猷館高校への親善訪問

高16回 畠山 茂樹

東日本大震災の後、福岡県立修猷館高校の2年生100名余が、翌2012年1月7日に中嶋利昭館長(当時)と共に被災地を訪問、更に一高に来校し2年生と交流を行ったが、その研修旅行は、毎年同様に継続されている。

当時、東京同窓会の幹事を務めていたことから、その話を聞いて、大学時代の修猷館OBの友人に謝意を伝えたが、その縁で、同校OB(昭和39年卒)との交流が始まり新年会、ゴルフ会などのお付き合いは今も続いている。

特に、交流を通じ両校OBは、双方の校風が極めて似ていると感じている。

この交流を続ける中で、16回の同期で修猷館高校を訪問して御礼を申し上げたい、との機運が次第に盛り上がってきた。

2014年12月に、東京幹事の久保田康文氏に相談したところ、奥山近訓館長(当時)宛の書状を快く引き受けて頂いたが、その後奥山様から、訪問を歓迎します、との丁寧なお手紙を頂いた。

準備すること約1年、16回中心の8名で2015年11月9日(月)に同校を訪問し、同年の4月に第31代館長に就任した江口善雄先生、渡邊生徒部長、深堀先生他多くの先生方にお会いして被災地訪問と一高との交流の御礼を申し上げ、親しくお話を伺った。

訪問に際し、大槻文彦初代校長の伝記「言葉の海へ」(高田宏)と「吉野作造と中国」(尾崎護)各2冊を謹呈し、「萩の月」を手土産とした。

案内された応接室には、歴代館長の肖像写真が掲げられ、又各種競技での優勝旗、カップ等が飾られ、同校の歴史が感じられた。

(天明4年から平成15年まで231年)

江口館長の話で、世のため人の為に尽くすという教育基本理念は脈々と受け継がれている一方、先生方の言葉からは生徒に対する信頼が篤く、自由な気風の中、自主性を重視していることを実感した。

又、修猷館は廣田弘毅、中野正剛、緒方竹虎等の政治家、加えて各界における指導的立場を担った多くの著名人を輩出してきたことは、知るところである。

暫く話を伺った後、深堀先生の案内で校内を見学したが、掃除の行き届いた校内は心のこもったおもてなしを受けた気持ちになったが、聞くところによれば、

生徒のご父母が時期を定めて清掃活動を行っているとのことで、共に教育に参加する姿勢を垣間見る思いであった。

更に2007年に新築された校舎と広いグラウンドは、極めて恵まれた環境を提供されていることが判った。

特に同校ではラグビー部が中心的存在で、全国トップレベルの福岡県でも有数の強豪であり、遡ると、昭和24年には国体で全国優勝を飾っている。

校内も素晴らしく整理されており、廊下は広々として、一角にはおよそ20人ほどの生徒が自由に打ち合わせをしたり、意見交換が出来る大きなテーブルが配置されていた。

その脇には文民宰相といわれた廣田弘毅の「ある日の廣田弘毅」の肖像画が、生徒の手に触れられる距離に置かれてあった。

2003年に完成した新体育館は防音装置が完備され、自動展開収納ができる椅子もあり、全校生徒が一堂に会して集まれるとのことだったが、訪問時には2年の女子生徒が創作性のある新体操の練習を行っていた。

処で、今回の訪問時に、思いがけず第一回の被災地研修の実行委員長を務めた浦越有希さんと山本明日香さん、中里絵美さん、それに一高OBで同期の布施響君（在学時、総会議長）が我々に会いに来てくれたことは望外の喜びであった。

更に、浦越さんの呼びかけで、同期の有志の皆さんが、仙台訪問時の思い出をまとめた小冊子を頂戴した。

皆さんの話から、当時強い余震、放射能飛散がある中での被災地訪問は生徒間でも激しい議論を巻き起こし、賛否両論が飛び交ったが、最終的には中嶋館長の判断を生徒が理解し、自主参加の形をとった。

多くの困難を乗り越えての被災地訪問と一高との交流であったことが、十分に理解できた。

その夜は博多の奥座敷として知られ、古くは山上憶良等万葉詩人からも愛された古湯二日市温泉にある、慶応元年創業の「大丸別荘」の大正亭に宿泊した。

翌11月10日(火) 午前中は修猷館同期の門谷氏の計らいで、菅原道真公の太宰府天満宮を参拝し、国立博物館を見学、更に昼からは前館長の奥山訓近様にお会いして、3年に亘る被災地訪問の御礼を申し上げ、昼食をご一緒しながら様々なお話をお聞きした。

同日の夕方からは、福岡在住の修猷館同期の女性2名、男性4名と交歓会を行ったが、初対面ながら、直ぐに打ち解けて、愉快的な会話を楽しむことが出来た。高校時代の話や、修猷館の卒業アルバムを開いて当時の美男、美女を語り大いに盛り上がったが、最後はお互いに館歌と校歌を歌い、エールを交換してお開きとした。

最終日の11月11日（水）は、東京の修猷館の皆さんの勧めで柳川を訪れ、川下り、北原白秋の生家博物館を見学し、うな重を楽しみ帰路に着いた。

一高在校当時、宇野量介校長は3月になると、日比谷高校と修猷館高校の話をし、更に一高新聞でも両校に触れていたが、修猷館に関しては、今回学校を訪問し、多くの先生方と話をしてその謎が解けた思いであった。

今回の訪問で、期待していた修猷資料館は、改修工事が延びた為に、残念ながら見る機会を次回に譲らざるを得なかった。

長い間心にあった修猷館への表敬と親善の訪問を果たすことが出来たが、計画の当初より、多くの方々から福岡の情報や温かい、細やかなご配慮を頂いた。訪問者一同、心からの御礼を申し上げたい。

訪問者名：和泉正郎、久保田一郎（17回）、坂上昌典、鈴木誠二、
対馬忠明、中村匡雄、沼倉悠、畠山茂樹